

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25750284

研究課題名(和文) スポーツ行為者の性格構造形成に影響を及ぼすスポーツ組織研究 国際比較を踏まえて

研究課題名(英文) Effects of Sports Organisations on the Formation of Players' Character Structure:
Based on an International Comparison

研究代表者

笠野 英弘 (KASANO, Hidehiro)

筑波大学・体育系・特任助教

研究者番号：20636518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、サッカー行為者の性格構造に着目しながら、日本のスポーツ組織の現状と課題を示した。現状として、日本サッカー協会は高度化を強調し、同協会への帰属意識を高める制度的構造を生成していることが明らかとなった。したがって、課題としては、愛好者をも組織化し、高度化への偏重から脱却できるような体制に変革していく必要性が示された。そして、ドイツ・ブラジルとの比較から、スポーツ組織は愛好者を含む会員のための組織であることの認識を高めることと、愛好者に対するゆるやかな支援が求められていることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study addresses the state of sports organisations and related issues in Japan, focusing on the formation of football players' character structure. At present, the Japanese Football Association emphasises enhancement of competitive performance and creates systematic structures to raise a sense of belonging among members. Therefore, a challenge was recognised in the form of the need to organize grass roots players as well as to reform the system into one that can be free of this overemphasis on enhancement of competitive performance. Comparisons with Germany and Brazil revealed the importance of raising awareness that sports organisations exist for all members, including grass roots players, and that it should provide some type of support for them.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：スポーツ組織 スポーツ制度 社会的性格 性格構造 サッカー ドイツ ブラジル 日本サッカー協会

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代スポーツの特徴は、高度化，大衆化，多様化という言葉によって説明される（松村，1999；佐伯，2006；多木，1992）が，その中でも，高度化への偏重という特徴が現代スポーツの様々な問題（セカンドキャリアやドロップアウト・バーンアウト問題，体罰やドーピング問題等）を引き起こしている1つの原因と考えることができる．高度化への偏重とは，これまで日本人のスポーツ観の特徴とされていた「身体よりも根性・闘志に代表される“精神主義”や，スポーツに熱中するあまり，遊びを忘れた極度の“勝敗主義”」（山口，1988，p.58）などにより，様々な志向のスポーツに比べて，高度化志向のスポーツの価値が高いというような価値の序列化が生じていることである．例えば，大学の運動部活動に所属している正選手と補欠選手を比較すると，正選手の方が就職に際しての便益などの社会的利益を運動部参加の重要な要因にしている（山本，1990）．また，大学の運動部に所属している部員は，同好会に所属している学生に比べて，実社会に出ても役に立つというような社会的有用性を求めている（蔵本・菊池，2006）．これらは，少なくともスポーツにかかわる社会においては高度化・競技力向上の価値が高いものとして捉えられていると考えられる．そして，高度化・競技力向上は，オリンピックのメダル獲得数，各スポーツ種目のワールドカップや世界大会のランキングなど，明確な目標設定や評価が容易なことから政策として掲げられ，競技者の活躍は国民に夢と希望，活力を与え，青少年の育成・教育につながるという大義名分のもと，最先端の科学技術や装置を使ったトレーニングの実施などのために，国から多くの予算が投入される（文部科学省（2012）が公表したスポーツ予算関係資料によると，平成24年度のスポーツ関係予算は約238億円であり，その68.2%が競技スポーツ関連予算となっている）．これは，メディアなどによって，努力，鍛練，修養，真剣，真面目，一生懸命，向上，練習，速い，高い，強い，といった語彙を用いて表現されるトップアスリートが目標や理想とされ，スポーツの高度化・競技力向上の価値が極めて高いものとして人びとに受け入れられているためであると考えることができる．これが過剰になると，ひいては，高度化・競技力向上を志向するスポーツこそが正統なスポーツであると捉えられることも考えられる．さらに，図1のように，大衆化における多様化（楽しみ志向や健康志向など）の一面である高度化（志向）のみを取り上げ

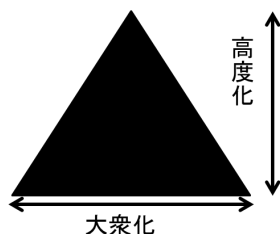


図1：近代スポーツのピラミッド・モデル

てピラミッド・モデルを示し，それが，これまで近代スポーツの理想的で調和的なモデルとされたことから高度化重視の傾向を理解することができる．

一方で，高度化と同じように多様化の側面である楽しみ，ストレス発散，健康維持などを志向する生涯スポーツは，スポーツの高度化の対概念として政策に掲げられはするものの，予算の比較に見られるように，高度化を志向するスポーツに比べて価値が低いものとして位置づけられていると考えられる．このことは，スポーツの高度化推進者が，しばしば図1のピラミッド・モデルを用いて，高度化を進めるための「底辺」または「裾野」の拡大として大衆化が必要であると力説することからも窺える．このことに関連して，柳沢（2012）は，スポーツ立国戦略において，表面上は地域スポーツ振興に軸足をおいたと評価されているが，内実は，地域スポーツが競技力向上の乗り物や草刈り場となっていると痛烈に批判している．したがって，楽しみを求める遊びのスポーツや，健康維持のために行うスポーツなどは，（正統な）高度化のためのスポーツに比べて，その価値が低く考えられる傾向にあると捉えられる．なお，本研究では，「高度化」を，競技力向上だけでなく，日本人のスポーツ観の特徴である精神主義や勝敗主義に関連付けられる，努力，鍛練，修養，真剣，真面目，一所懸命，向上，練習，速い，高い，強い，といった意味を含み，勝利至上主義にもつながる概念として捉えるものとする．

(2) 以上のような高度化への偏重は，スポーツ行為者を含めたスポーツにかかわる人びとの中に，「高度化を志向する社会的性格」が形成されているために生じるものとして捉えることができる．しかし，1968年のメキシコオリンピック・スポーツ科学会議において定義されたスポーツは，「遊戯の性格を持ち，自己または他人との競争，あるいは自然の障害との対決を含む運動」であり，菊（2011）によれば，ヨーロッパ各国では，スポーツや身体活動の内在的な価値，すなわちスポーツに関わって自在な楽しさや喜びを享受するプレイとしてのスポーツの価値的性格が重視されているという．したがって，様々な問題を生起させる高度化への偏重に対して，ヨーロッパ各国の人びとに形成されているこのような「プレイを重視する社会的性格」を踏まえつつ，日本人のスポーツに対する社会的性格を変革していくことが求められているといえよう．社会的性格の概念及び定義についてはガース・ミルズ（1970）が用いる「性格構造」と同義のものとして扱う．ここで，スポーツ行為者の社会的性格を変革するためには，スポーツ行為者（の社会的性格）の理解が必要であり，そのスポーツ行為者の社会的性格が形成されるメカニズムの解明が要求されることになる．スポーツ社

社会学領域では、スポーツ行為に関する研究はスポーツ参与研究やスポーツ的社会化研究として扱われ、国内外を問わず、特に1970年代から80年代にかけて数多くの研究成果が発表された。これらの研究では、社会的要因との関係が指摘されてきたものの、その社会的要因との関係の中で、いかに個人が直面した問題の状況を克服していくことができるのかというように、その中心的議論は個人的問題として捉えるに止まっているように思われる。すなわち、これらの研究視点は、社会化の望ましさを「個人の受容や形成に帰着させており、...個人の主体性を強調することによって...スポーツ界やそれに関係する社会の側の」構造的な問題が隠されてしまっている(菊, 2008, p.35)のである。しかし、「本当の参与研究や社会化研究は、...体制変革のための中核となる科学であり、またそうでなければならぬ」(影山ほか, 1984)と指摘されるように、個人的な問題は、より社会の構造的な問題として捉え、その社会構造や制度を変革していく視点(メカニズムの解明)が必要であると考えられる。

ところで、ミルズ(1965)は、「人間の最も内奥にひそむ諸特徴さえも、その多くがいかに社会的に型どられ植えつけられたもの」であるが、現代の社会科学において最も顕著な意味をもつ発見であるといい、「恐れや憎しみや愛や怒りなどの情動のあらゆる変態は、...それが起こる個人の社会的な生活史や社会的文脈につねに密接に結びつけて理解されなければならない」という。さらに、ガス・ミルズ(1970)は、情動を含む個人の性格構造は、社会の制度的秩序や諸局面などの社会構造により説明され、その中でも特別な他者である「制度の長」が最も影響を及ぼすものであることを明らかにしている。笠野(2012)は、この理論を、サッカーを事例とした日本のスポーツ界の状況に当てはめ、日本におけるスポーツ行為者の性格構造に最も大きな影響を及ぼす「スポーツにおける制度の長」が「スポーツ組織」であり、不安や劣等感などのスポーツ行為者の個人的な問題を解決することができる分析視座をもつ「新たなスポーツ組織論」を提示した。そして、具体例として、日本におけるサッカー実施者が抱く不安が生成される構造を理論的に明らかにした。なお、「スポーツ組織」の定義は、「日本における各スポーツ競技を統括する権限と義務をもつ各スポーツ競技の国内統括団体であるスポーツ競技団体」(笠野, 2012, p.86)とする。その構造を簡単に説明すれば、スポーツ組織である日本サッカー協会が創り出す制度の諸局面(スポーツ・シンボル、スポーツ・テクノロジー、スポーツ地位の3局面であり、の局面はスポーツ・イデオロギー、スポーツ・ルール、スポーツ・シンボル、の局面はスポーツ行動様式、スポーツ文物、の局面はスポーツ組織という要素によって構成される)によ

て、スポーツ行為者であるサッカー実施者の性格(ここでは高度化志向の性格)が形成される。そして、その制度から外れた者は、高度化志向の性格が形成されているが故に、頂点を目指す道からドロップアウトしたと考える劣等感や、正統な道から外れたというような不安や疎外感を抱くということである。

この論理によれば、スポーツ組織が創出する制度的構造(の構成要素)を変革することにより、日本におけるスポーツ行為者の社会的性格も変革され得るといえよう。すなわち、スポーツ組織が生成する制度的構造を構成する要素を変えていくことで、スポーツ行為者の社会的性格が高度化志向のみに一元化されるのではなく、楽しみ志向や健康志向などの多様な志向性をもつものにしていくことができるということである。ここに、スポーツ組織が生成する制度によってスポーツ行為者の社会的性格の多くが決定される構造(図2)が理論的に説明される。

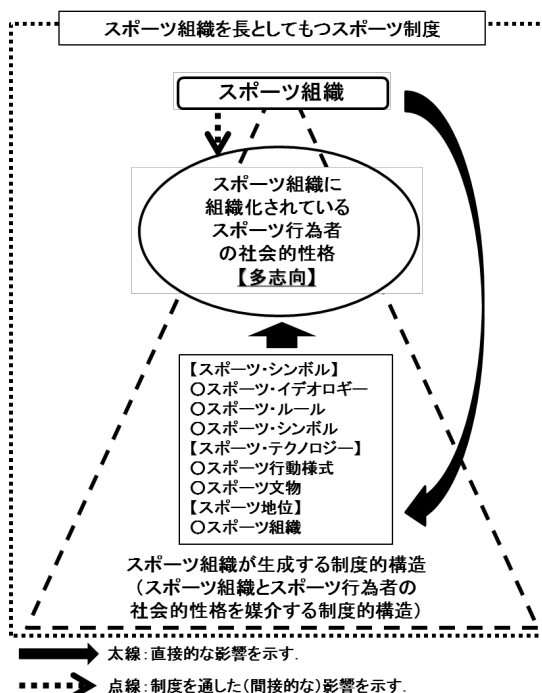


図2: スポーツ組織が生成する制度的構造によってスポーツ行為者の社会的性格が形成される構造

今後は、この理論的構造を理念型として捉え、(その理念型と比較して)実際の現象を解釈すること(事例分析)により、現状と課題を明らかにする必要がある。それと同時に、その事例分析を通してこの理論を修正・強化していくことも必要となる。また、先に述べたように、スポーツのプレイとしての価値的性格を重視している諸外国の状況(スポーツ組織とスポーツ行為者の構造的関係)も明らかにし、日本と比較することで、我が国におけるスポーツ組織がどのようにスポーツ行為者の性格構造の形成に影響を及ぼしているのかの構造的特徴が明確になる。それらを踏まえて、今後の我が国のスポーツ組織の在り方を検討していくことが求められよう。

2. 研究の目的

本研究の全体構想では、現代スポーツにおける高度化への偏重がもたらすスポーツ行為者の劣等感、不安、疎外感などの問題を、スポーツ組織が主体的にその構造を変革することで解決できるというメカニズムを解明し、これからの我が国のスポーツ組織の在り方を示すことを目指す。そこで、本研究の目的は、サッカーを事例として、日本におけるスポーツ行為者の性格構造の形成過程（不安というような個人的な問題の生成過程を含む）をスポーツ組織との関係から明らかにし、諸外国の場合と比較することにより、我が国のスポーツ組織の現状と課題を示すことである。そして、そこで示された課題から、これからのスポーツ組織の在り方についても若干提案したい。

本研究は、高度化への偏重という特徴をもつ現代スポーツによって生じる様々な（個人的なものとして扱われる）問題を、その原因を個人に帰結せずに構造的な問題として捉えることにより、また、諸外国との比較を踏まえてスポーツ組織との関係に焦点化することで、その問題を主体的に制御し、解決する方法（具体策）を提示することが期待できるという点に特色があると考えられる。そして、スポーツ行為者の性格的な問題からスポーツ組織の在り方を考察していくという視点は、市場原理に基づく経営・マネジメント的な組織論が主流を占めている現代のスポーツ組織研究において、新たな視点の1つを提示するものとなる。

3. 研究の方法

本研究では、(1)第1に、先行研究を踏まえ、スポーツ行為者の社会的性格の問題を、特にスポーツ組織との関係から分析することの重要性を指摘しながら、分析の視点と方法を示す。その視点から、(2)第2に、日本サッカー協会を中心とした日本サッカーの現状を示す。そして、(3)第3として日本におけるサッカー行為者の性格形成過程を日本サッカー協会との関係から解釈・分析し、そこから導かれる日本サッカー協会の現状と課題を示す。さらに、(4)第4としてドイツの事例分析と、ブラジルにおける事例分析を行い、それぞれの事例と日本の場合を比較することで、日本サッカー協会の課題をしめす。最後に、(5)日本サッカー協会の現状と課題についてのまとめを行い、我が国のスポーツ組織の課題や今後のスポーツ組織の在り方について若干の提言を行う。

4. 研究成果

(1)先に述べたように、これまで、スポーツ行為者の社会的性格の形成過程は、スポーツ的社會化論の中で議論されることが多かったが、そこでは、体制変革の視点の欠乏が指摘でき、それゆえに、スポーツ行為者の問題をスポーツ組織との関係に焦点化した議

論がほとんどみられなかった。しかし、黒須（1988）やリーヴァー（1996）による、スポーツ行為者の社会的性格がスポーツ組織の違いなどによって異なって形成されることが示唆された研究、「組織」と「制度」の関係性を明確にした盛山（1995）の制度論や、多々納ほか（1988）が示した制度としてのスポーツ論などを踏まえると、スポーツ行為者の社会的性格の形成過程（あるいは問題）を、スポーツ組織研究の射程に捉えることは、スポーツ組織それ自体の改革やスポーツ組織が生成する制度改革に示唆を与えることが可能となる点で、非常に重要かつ必要であることが示された。すなわち、スポーツ行為者の社会的性格がスポーツ組織によって形成され（もちろん全てではない）、その社会的性格の問題をスポーツ組織の問題に帰結させる考え方（視点）が必要であり、したがって、スポーツ組織研究として捉えることが重要なのである。

また、スポーツ行為者の社会的性格の形成過程を分析する方法としては、ガス・ミルズ（1970）の『性格と社会構造』の理論に基づきながら、ライフヒストリーを解釈していく方法が有用であることが示された。すなわち、呈示したライフヒストリーから、高度化志向などのスポーツ行為者の社会的性格とともに、ガス・ミルズ（1970）の理論に基づく制度の構成要素を解釈し、それら両者の関係性、さらにその制度を生成しているスポーツ組織との関係を分析する。これにより、スポーツ行為者の社会的性格の形成過程をスポーツ組織との関係から分析することができ、スポーツ組織それ自体の改革あるいはスポーツ組織が生成する制度の改革に示唆をもたらすことができるものと考えられた。ここでは、個人の変容に焦点をあてたスポーツ的社會化論でも、個人に影響を及ぼす空間に焦点をあてた松尾（2015）のような研究でもなく、個人（の社会的性格）に影響を及ぼす制度を変革する主体としてのスポーツ組織に焦点をあてた視点が必要不可欠とされる。なお、松尾（2015）が指摘するように、スポーツ行為者の社会的性格が形成される制度（空間）は、スポーツ組織によってのみ生成されるものではないため、スポーツ組織が制度の長として最も影響力が大きい制度形成の主体として捉えられる（笠野、2012）にしても、制度形成に影響を及ぼす他の主体についても考慮に入れる必要はある。

(2)次に、日本サッカー協会を中心とした日本サッカーの現状を、「スポーツ組織の自立」という視点から示した。すなわち、愛好者を含むスポーツ行為者を、スポーツのための組織や制度を通して組織化したスポーツ組織のことを、「自立型スポーツ組織」と捉え、それに照らし合わせて日本サッカー協会の現状を考察した。そこでは、自ら金銭化を成し得る事業（Jリーグというプロ・リー

グ)の参加者が、スポーツのためのチーム・クラブ(組織)や、スポーツを行うことで金銭を得ることができる選手(競技者)によって構成されており(金銭的な自立)、その統括するスポーツ(サッカー)を主体的に規制している(自律)という2つの条件を備えていると捉えられる日本サッカー協会(自立したスポーツ組織)が、それらの条件に加えて愛好者を組織化(愛好者を含むスポーツ行為者を、スポーツのための組織や制度を通して組織化)しているという条件を加えた「自立型スポーツ組織」にはなっていないというところに日本サッカー協会の課題があることが示された。

(3) 上述した日本サッカーの現状を踏まえつつ、日本におけるサッカー行為者の性格形成過程を日本サッカー協会との関係から解釈・分析し、その関係から導かれる日本サッカー協会の現状と課題を示した。そこでは、機関紙分析及びライフヒストリー分析により、日本サッカー協会が主体的に創り出してきた制度的構造の特徴が、日本におけるサッカー行為者の社会的性格を高度化志向に形成しているものと解釈できた。それ故に、その制度から外れた(未登録となった)者は、劣等感や疎外感を抱くことになると考えられた。ただし、ライフヒストリーの解釈からは、日本サッカー協会が形成してきた制度に加えて、教育(学校)制度の特徴が混在しており、これら2つの制度的特徴により、日本におけるサッカー行為者の社会的性格が形成されていることが指摘できた。この状況は、すなわち、特に教育(学校)制度に依存していた依存型スポーツ組織による制度的構造から、自立型スポーツ組織による制度的構造への過渡期として理解することができるものであった。そして、日本サッカー協会は、このように教育(学校)制度の影響もあるが、自ら生成した制度を通してサッカー行為者の社会的性格を形成しており、社会的性格を主体的に形成することができるという意味において、サッカー行為者を自立的に組織化しつつあるもの(現状)として捉えることができた。さらに、このような現状から導かれる組織的課題とは、高度化以外のスポーツに対する志向の価値をいかに強調し、愛好者を愛好者のまま(として)組織化できるような制度的構造をいかに生成していくことが可能なのかということであった。

(4) ドイツ及びブラジルにおけるサッカー行為者の社会的性格と当該国サッカー連盟との関係からは、日本サッカー協会の課題が示された。ドイツの事例では、ドイツサッカー連盟(以下「DFB」という)が、DFBは会員のための組織であり、会員それぞれ(高度化志向の会員もプレイ志向の会員も含めて)のニーズに応えることの重要性を認識しているため、DFBが形成する制度的環境の(クラ

ブ)の中で育っても、サッカー行為者は高度化志向とプレイ志向を別に捉え、優劣をつけないのだと考えられた。それに対して、日本では会員のための組織であるという認識が乏しく、そのことが日本サッカー協会の課題として示唆された。したがって、日本サッカー協会は、高度化志向であれプレイ志向であれ、同協会に登録する会員のための組織であるという認識を高める必要があると考えられた。そのためには、練習が週に2回程度のクラブ(毎日練習して競技レベルの向上を第一に目指すクラブに対して)や、遊びとしてサッカーができる環境づくり、移籍をしやすい制度づくり等が日本サッカー協会の課題として指摘できた。

また、ブラジルの事例では、ミナスジェライス州サッカー連盟が制度的環境を形成しないことで、多くのサッカー行為者がサッカーは遊びとして楽しむものであるという社会的性格を身につけていると考えることができた。しかし、それは、ブラジルにおいてはサッカーが既に多くの人びとによって行われ、サッカーをするグラウンドや施設などが充分にあるという条件が可能にしているものであった。一方で、日本においてはブラジルほどにサッカーを愛好する者が多くはなく、サッカーの場(特に遊びとしてサッカーをする場)が充分でないことから、日本サッカー協会も愛好者と呼ばれる人びとに対しての制度的環境を形成しない方が、サッカーそのものを楽しむ社会的性格が形成されるようになる、とはならない。したがって、日本サッカー協会としては、愛好者に対しては、特に遊びとしてサッカーをする環境(場)を整備する程度にとどめ、積極的にリーグ戦や大会を設定したり指導者を派遣して練習をさせたりするのではなく、愛好者に自由に利用させる(サッカーをさせる)ということ、彼らの社会的性格をプレイ志向にしてい(あるいはプレイ志向のままにする)ことが可能になることが示唆された。これがブラジルの事例から示唆される日本サッカー協会の課題である。

(5) 以上から、本研究の目的である我が国のスポーツ組織の現状と課題は次のとおり示される。日本サッカー協会は、教育(学校)制度の影響もあるが、自ら生成した制度を通してサッカー行為者の社会的性格(特に高度化志向)を形成しており、社会的性格を主体的に形成することができるという意味において、サッカー行為者を自立的に組織化しつつあるものとして捉えられる(現状)。そして、この現状から導かれる組織的課題は、高度化以外のスポーツに対する志向の価値をいかに強調し、愛好者を愛好者のまま(として)組織化できるような制度的構造をいかに生成していくことができるのかということである。その課題に対して、ドイツ及びブラジルの事例から、日本サッカー協会は、高度

化志向であれプレイ志向であれ、同協会に登録する会員のための組織であるという認識を高め、それぞれのニーズに応じていくことと、愛好者に対しては、遊びとしてサッカーをする環境(場)を整備する程度にとどめ、積極的な支援(リーグ戦や大会を設定したり指導者を派遣して練習をさせたりすること)よりも、愛好者に自由にサッカーをさせるということが今後求められるようになるのではないかと考えられた。

<引用文献>

ガス・ミルズ：古城利明・杉森創吉訳(1970)性格と社会構造。青木書店。

影山健・今村浩明・佐伯聰夫(1984)スポーツ参与の社会学について。体育社会学研究会編，スポーツ参与の社会学。道和書院，pp.1-23。

笠野英弘(2012)スポーツ実施者からみた新たなスポーツ組織論とその分析視座。体育学研究，57(1):83-101。

菊幸一(2008)まとめと今後の課題。トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト編，トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのカリキュラム開発(3)平成19年度報告書～日本型支援モデルの提案～。トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト，pp.34-36。

菊幸一(2011)スポーツ基本法の社会学的考察。体育の科学，61(12):931-935。

蔵本健太・菊池秀夫(2006)大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究。体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較。中京大学体育学論叢，47(1):37-48。

黒須充(1988)クラブスポーツと学校運動部の可能性。選手づくりの長所と短所。三好喬ほか編，スポーツ集団と選手づくりの社会学。道和書院，pp.67-84。

松村和則(1999)スポーツと開発・環境問題。井上俊・亀山佳明編著，スポーツ文化を学ぶ人のために。世界思想社，pp.266-282。

松尾哲矢(2015)アスリートを育てる<場>の社会学。青弓社。

ミルズ：鈴木広訳(1965)社会学的想像力。紀伊國屋書店。

文部科学省(2012)スポーツ予算関係資料。ロンドンオリンピックにおける選手育成・強化・支援等に関する検証チーム(第2回)配布資料(資料2)。http://www.next.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/016/s_hiryu/_icsFiles/afiedfile/2012/10/19/1327015_1.pdf(参照日2015年11月26日)。

リーヴァー：亀山佳明・西山けい子訳(1996)サッカー狂の社会学。世界思想社。

佐伯年詩雄(2006)現代スポーツへの眼差し。菊幸一ほか編，現代スポーツのパーспекティブ。大修館書店，pp.11-21。

盛山和夫(1995)制度論の構図。創文社。

多木浩二(1992)スポーツという症候群。多木浩二・内田隆三編，零の修辞学。リプロ

ポート，pp.352-399。

多々納秀雄・小谷寛二・菊幸一(1988)「制度としてのスポーツ」論の再検討。体育学研究，33(1):1-13。

山口泰雄(1988)日本人のスポーツ観。森川貞夫・佐伯聰夫編，スポーツ社会学講義。大修館書店，pp.56-67。

山本教人(1990)大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較。体育学研究35:109-119。

柳沢和雄(2012)「見て見ぬふり」の怖さ。雑感：スポーツ基本計画からみた構造問題。日本体育・スポーツ経営学会会報，61:2-5。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

笠野英弘。日本サッカー協会によって形成されてきた制度に関する一考察：機関誌分析から。査読有り。体育・スポーツ経営学研究，第27巻第1号，87-116，2014年(原著論文)。http://ci.nii.ac.jp/naid/110009809652

笠野英弘。スポーツ行為者及びスポーツ組織の構造的連関に関する研究：日本サッカーを中心として。査読無。筑波大学体育系紀要，第37巻，149-153，2014年(研究報告)。http://hdl.handle.net/2241/121322

[学会発表](計2件)

笠野英弘。スポーツ組織研究におけるスポーツ行為者の社会的性格。日本体育学会第66回大会，国土館大学世田谷キャンパス(東京都世田谷区)，2015年8月26日(口頭発表)。

笠野英弘。日本におけるサッカー実施者の性格特性に関する一考察：ライフヒストリー分析を通して。第29回日本保健医療行動科学会学術大会，筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区)，2014年6月22日(口頭発表)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

笠野 英弘 (KASANO, Hidehiro)

筑波大学・体育系・特任助教

研究者番号：25750284